社会福祉法人アルカディア
令和６年　１２月発行　第６６号

一歩

法人設立 25 年を迎えて

GH

はばたき

麦の家

麦の家
フリモ

麦の家
インスタグラム

MUGINOIE_OTA

祝　25回目の年越し

●時は怒涛のごとく

　アルカディアは2000年（H12）、９月13日に誕生した（登記日）し、25年目に入った。あっというまに時間が過ぎていった。当初から苦労を共にしてきた人たち、その頃は20代になったばかりだったが…。今では家庭をもち、子供たちも大きくなった。中堅・ベテラン職員たちも、いつのまにか結婚し、子もち家庭を築いている。25周年はさしたる記念行事もないまま、素通りしようとしているが…。

　いつの日か…例えば30周年目くらいには、家族ともども一同に会し、BBQでもやりたいものだ。

　まず、この紙面をかりて25年目の年越しを全ての職員みんなでお祝いしたい。今、ペンをとっている日は、12月13日。＜光陰矢の如し＞とはよくいったもので、今年（2024年）も残りわずか。一年が（一ヵ月も！）あっというまに過去となる。

　この25年を振り返るにあたり、小難しい能書きは言わないようにしたい。できるだけ、楽しく明るい想い出話に花を咲かせたい（その楽しいお想い出の中には「こんな話題をニュースレターに載せなくてもいいのに！」と思うスタッフもいるだろうが…（それは愛嬌として理解してほしい）。
まだまだ法人アルカディアは一歩一歩前に進んでいかねばならないし、又、必ず前進していくから…

●ブレない理念と実践

　もう昔のことだが…病院を退院～援護寮～グループホームへと暮らしの場を移していったTさん、「実家に帰りたい」がいつもの口癖だった。何度か兄弟や地元役所の保健師さんと掛け合うが…。思うようにいかなかった。「Tさん、今は諦めよう」と促していたが…。数年が経ったある日、世話人さんから「実家に帰れることになりました」との報告を受けた。

　この間、世話人さんは地元の役所に足しげく通い詰めていたようだ。やっとのことでＴさんは待望の実家での生活が実現したわけだ。

　数年後、Ｔさんが再入院した噂話をきいた。

　ここで大切なのは、再入院した結末ではなく、数年間でもＴさんが＜したい生活・望んだ暮らし＞が実現したという事実である。Ｔさんにとって＜生まれ育った家＞での暮らしは、苦労と伴いながらも＜楽しいひととき＞であったことだろう。

　これが法人の掲げる＜利用者本位＞の理念と実践なのだろう。この理念は一貫してブレていないことに誇りをもちたい。

●いくつかの想い出～笑える想い出～

　25年という四半世紀の時は様々な出来事を創りだしてきた。組織やその行いは、そこに＜集う人たちの歴史＞であり、喜怒哀楽の連鎖ともいえよう。記憶をたどり、思い起こすままに幾つかの出来事を述べてみよう。

○小豆島って？～なんて読む？～

　夜勤者のＫさん、ある朝の申し送りで（文章の脈略は忘れたが…）＜小豆島＞を「アズキシマ」と読んでしまった。聴いていた職員はしばし黙りこんでいたが…誰かがたまらず笑い出したのをキッカケとして全員が腹を抱えて爆笑し始めた。

　Ｋさん、何が起きたのか？気がつかず、ポカンとしていたが…。事の真相が明らかになるや、頭を抱え込み、その先に進まなくなった。

　確かに＜小豆＞はアズキとも読む。しかし…＜小豆島＞と書かれていれば、簡単にわかるはず…。それとも関東の人には瀬戸内海に浮かぶ有名な島の名など「知らない」ことなのでしょうか？

　もう辞めた人ゆえ、こんな話も時効だろう。現在も勤務していたら語り継がれいること間違いなし…。＜アルカディア25年＞の歴史上、10本の指に入る面白い話。

○Sさんの面接～最初は度肝をぬかれたが…～

　Sさん、面接当日、金髪姿で現れた。大抵の場合、面接は＜リクルートスーツ＞と相場が決まっているが…。他の福祉法人であれば、この時点で大方不採用になっても不思議はない。

　しかし…。そこがアルカディアの懐の広さであろう。話はきちんとしてるし…人は＜外見＞で判断できないことが往々にしてあるものだ。更に＜金髪＞で面接する＜度胸＞が気にいった。「僕はロックンローラーです」とも言った。レッドチェッペリンの話題で面接そっちのけで盛り上がったように記憶している。

　そんな訳で採用。彼は真面目で真剣に仕事に打ち込み、今もなお法人に在籍し奮闘している 。茶髪は現れても金髪はもう二度とお目にかかれないという

　この＜金髪事件＞は今も語り継がれている。Sさん、改めて言っときますが…これって評価しているのです。

〇職員旅行～いろんな所でのいろんな体験～
　アルカディアには「遊びと仕事の両立」という合言葉がある。もっと言えば、遊びの間っこに仕事があるといっても過言ではない。
　という訳でコロナ禍以降、影を潜めてしまったが…。職員旅行は毎年の恒例行事となっていた。
□海外、国内旅行ともオモロカッタ！いろんなところに行きました。バンコクはハードスケジュールで２毎日2～3時間しか睡眠をとらなかったが実に楽しかった。ハワイ旅ではワイキキでの世話人さんたちのハシャギぶりは圧巻でした。広島～萩～津和野も大いに盛り上がった。
北海道も楽しい想い出になった。Kさん、Hさん若かったネ。最近入職したスタッフは、このような体験をしていないのが残念ですネ。
●苦労したこともあったが…～今では楽しい想い出～
〇GHグループホームのボヤ騒ぎ
　あるとき、第１長手ハウスで＜ボヤ騒ぎ＞があり、消防車2台が駆けつける出来事があった。ゴミ袋に火のついた紙きれを入れただけのこと…。近くにいた利用者が消し止め、大事にならなかったが…。これくらの＜ボヤ＞で消防車二台とは、大袈裟すぎると思うのおだが…。消防署にとってグループホームは特別の存在なのだろうか？
他にも＜アパートでの殺傷事件＞、＜グループホーム移転を巡る住民の反対意見＞などいくつかの困難な事態があったが…。いずれも乗り越えてきた。区長や民生委員を味方につける法人方針が功を奏したといえるだろう。
　確かに＜火事＞はいまでも怖いことの一つだが…。コロナ禍もなんとか乗り切ってきている。
〇とにかく毎日が忙しかった
　法人設立から約10年間くらいは、とかく忙しい日々が続いた。なすべきことが在り過ぎて目の回るような忙しさだった。法人の組織も実践もまだ整理されていなくて一人のスタッフがいくつもの業務をかけもっていた。
私はといえば、法人内では＜グループホームの立ち上げ＞、＜人事＞、＜育成＞、＜ふらっと＞や援護寮＞の掛け持ち、＜見学者対応＞、法人と同時期設立された＜群精社協＞の各種外部委員などなど今から思い起こすに「よく体がもったもんだ」と思えるほどの仕事を来る日も来る日もこなしていた。昼食はほぼカップヌードル、夕食もコンビニで済ませていたように記憶している。
　ただ、どの仕事もやらなければならないことであり、「こんな時期もあるのだ」と諦め加減。
　しかし、今、振り返るに、どれをとってみても、＜楽しい思い出＞のように感じる。実際、やりながら＜シンドサ＞と＜楽しさ＞両面をあわせもっていたのだと思う。
　これからも法人の苦労は絶えなく続くだろうが…。＜好きなことをやりたいようにやっている＞のだから、苦労は過ぎてしまえば笑い話となる。このような＜気持ちの持ち様＞が大切なのだと思うが…。スタッフの皆さん、どう思いますか？

●これから決して平坦な道ではないが～そろそろ世代交代の時期～
　吉田拓郎の初期作品のアルバムに＜古い船をいま動かせるのは古い水夫じゃないだろう＞というアルバムがある。（ちなみに彼の名を一躍この世に知らしめることとなる＜イメージの詩＞が収録されている）
　「古い船に乗り、船出するには新しい船乗りがふさわしい」という意味合いだ。
　法人<アルカディア>は、今、新しい水夫が乗り込み、船出しようとしている。
25年間で船は少々ほころんでいる。
　しかし…新しい水夫は、果敢なチャレンジ精神をもってこれらを乗り越えていくだろう。
ともあれ、この文を読んでスタッフが笑顔を浮かべ、ほほえましさを感じてくれれば、それでOKです。

2024.12.13
（社福）アルカディア
理事長　中田　駿

私流のインテークの考え方

令和6年9月に群馬県精神保健福祉士会の初任者研修「インテークについてを知ろう」の講師をさせていただく機会があった。対象者はソーシャルワーカーとして5年未満の方。精神保健福祉士の資格を有し、アルカディアに入職して11年目。5年未満の方々からしたら、先輩になるのかもしれない。いや…いつまでも新任、初心者でいることはできず、どこかで『先輩・中堅・徐々にベテラン？』という意識、自覚を持つべき段階かもしれない。そこで初任者の方々に、自分が経験してきたことを伝えるということは、私が大切にしている『姿勢』についてを振り返るきっかけにもなった。

インテークの基本は、利用者・クライアントとの初めての接点であり、情報収集、信頼関係を築く、サービスの説明等、他にも多くの考えるべきことがある。その中でも私の中での根底にあることは、相手を障がい者として受け止めて話すのではなく、同じ生活者であると同時に、人生の先輩と話しをさせて頂いているといった『尊重、尊敬の気持ちを忘れない』こと。そして『丁寧な言葉遣い』である。インテークでのヒアリングは、経験や場数によって培われていく対応力があると思う。ただ、私が思うインテークの大切なポイントは『話しを聞く』のではなく『話を聞かせていただく』といった気持ちである。へりくだった姿勢ではなく、人としての尊重を忘れないことである。初めて会った人に、自分の人生の出来事を話すことは敷居が高いと多くの人が感じるはず。『支援の過程で必要だから』と考え態度に出てしまうと、相手はそれを感じ取り話したくなくなると思う。人によっては事情聴取のように強制力を感じてしまうかもしれない。お互いの関係性、これからの相手・利用者の事を考えるのであれば、インテークの重要性とそれに向かう『姿勢』の重要性は高くなるはずだ。インテーク時の相手・利用者によっては会話の時間や話す速度、目線の位置等、変えることはあるが、私の中で変わらないことは尊重の気持ちである。

1番伝えたかったこととして話しながら感じていたことは、年齢の若い新任者や、他でキャリアを築き福祉で新任者として働く方共に『相手を尊重』という話をしていた際に、頷かれていた方が多かったこと。共感できるポイントであったと思うと同時に、意外性を感じてもいた。『相手を尊重』…当たり前と言われればそれまでだが、この文章に目を通している方も、経験年数を重ねるごとにその感覚が変化してはいないだろうか。良い変化なのか。自分では気付かないうちに尊重しているつもりになってはいないだろうか。初任者・経験が浅い頃は、相手への尊重を体現することは大変なことかもしれない。それは経験による蓄積で自分なりの表現へと変化していくものでもある。偉そうに書いてしまったが、『本心で相手を尊重』することは、理屈だけではないと思う。思い返せば私が4年目の頃、初めてお会いした利用者に尊重（その時は丁寧な姿勢と考えていた）の気持ちを持ち話をしていたつもりだったが、利用者から「何も知らないくせにズカズカ言わないでくれ」と怒らせてしまったことがあった。土足で相手の気持ちに踏み込んでしまった後悔ばかりが強く残った出来事。今でもその利用者とは関りがあり、「あの時は小林さんも若かったからね。イラっとしたけど、自分のことを想って話してくれてたと思うよ。」と話していただいたことがあった。正解は常に変化し、利用者個々人で違うこと。だが『尊敬の姿勢』を貫くことで伝わることもあることを教えて頂いた。

当初は「向いていないのかな…」と勝手に諦めてしまう気持ちもあったが、同僚や先輩、上司に考え方や接し方等、今の私にある『相手への尊重』に繋がるアドバイス、時に叱咤激励をもらえたからこその今があると感じている。

新任者、そして今後のアルカディアを支えていく後輩に！「関わりの成否はいつでもわからない。だからこそ、敬意だけは決して失ってはならないということを大前提とすべきではないだろうか」。

（記）アルカディアグループホーム事業所　小林勇也

編集後記

関係機関の皆さまの支えや、利用者の皆様から学ばせて頂くことで法人は25周年を迎えることが出来ました。
今後も法人理念の根幹である「利用者本位」の体現。「懐の深い法人」であり続けられるよう精進してまいります。
令和６年も大変お世話になりました。

ニュースレター編集員

法人本部
群馬県太田市鶴生田町733-123
TEL：0276（20）2509
FAX :0276（20）2510
HP：http//arcadia-gr.com